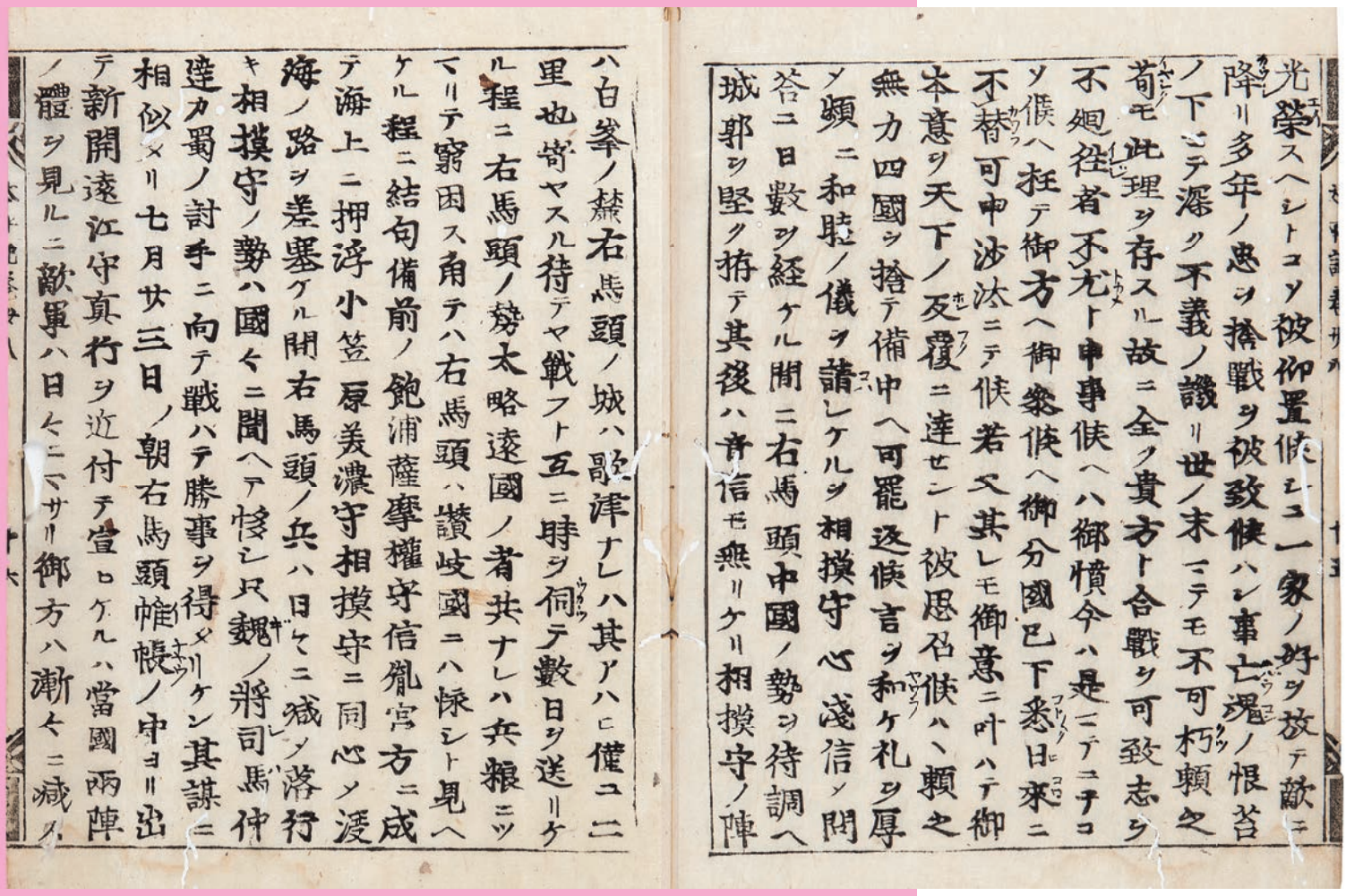
郷土博通信

No.9

2017 春



慶長８年古活字版『太平記』部分（解説８頁）

CONTENTS

■ 慶長8年古活字版『太平記』部分 ―― 1
■ 展示室紹介 ―― 2～4
■ 天皇と将軍の華麗なるパレード ―― 5～7
■ 慶長8年古活字版『太平記』解説 ―― 8
■ 体験講座お知らせ ―― 8
■ 第8回公開講座お知らせ ―― 8

公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館

第１展示室

― 藩札―館蔵資料から ―

当館は、開館以来収集された国内外の貨幣を収蔵しています。本展はその中から江戸時代の紙幣、藩札を中心にご紹介するものです。

江戸時代に流通していたお金ですぐ思い浮かぶのは、小判、丁銀、一文銭などですが、これらはいずれも、金貨、銀貨、銭貨（銅貨等）という三種類の金属貨幣です。金貨は小判一枚を一両で数える計数貨幣、銀貨は重さの単位である匁（一匁=3.75g）で表す秤量貨幣、銭貨は寛永通宝一枚を一文で数える計数貨幣です。当時の貨幣制度を端的に表した「江戸（東国）の金遣い、大坂（西国）の銀遣い」の言葉のあるように、江戸を中心とする地域では金貨、大坂を中心とする地域では銀貨を基本に経済活動を行いました。

こうした金属貨幣以外に諸藩が財政赤字補てんや少額貨幣の不足緩和等を目的として、幕府が鋳造する三貨（正貨）との兌換（だかん）を原則に、認可を受けて発行した紙幣がありました。これが藩札（当時は金札・銀札・銭札・米札等と呼ぶ）です。確認される最初の藩札は、実物が残っていないものの、備後福山藩で寛永7年（1630）に発行された銀札、銭札です。18世紀中頃までは、さほど多くの藩で発行されることはありませんでした。18世紀後半以降、特に19世紀に入ってから発行が増加し、明治初頭の調査によると全藩の約8割、244藩が発行していました。讃岐では丸亀藩が宝永2年（1705）、多度津藩が享保17年（1732）、高松藩が宝暦7年（1757）に最初の藩札を発行しました。（図①高松藩札 安永七の黒印あり）

紙幣である藩札は金属貨幣に比べてそれ自体の価値は高くありません。しかし、偽造や変造により利益を得る者の出現もあり、その対応に諸藩は苦労していたようです。展示資料それぞれの、用紙の厚さ、色調、風合いの違いまた、細かな図案など様々な工夫に現在に通じる偽札対策を垣間見ることができます。

今回の展示では藩札の他、一橋家が木綿の専売制度実施に際して発行した手形（図②）や商人が発行した私札（図③）など様々なお札を紹介しています。江戸時代紙幣の多様さの一端を知っていただければ幸いです。

（廣瀬 永津子）

表　　裏

▲図① 高松藩札　銀参分
18.9×5.3㎝

▲図② 御産物木綿預手形　壹文目
15.3×4.2㎝

▲図③ 生魚切手　壹分
11.8×3.4㎝

久米通賢資料室

第２展示室

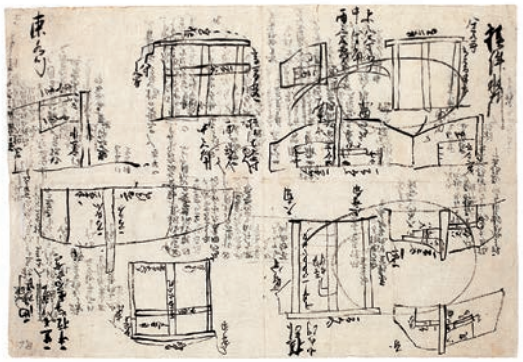
― 久米通賢の坂出塩田開発 ―

文政7年（1824）、久米は財政再建策のひとつとして坂出の塩田開発について述べた口上書を藩に提出、藩主松平頼恕の命により、文政9年（1826）、開発に着手しました。

今回の展示では、塩田開発前から完成後までの青写真を記した資料を、年代順にご紹介します。坂出浦の地形測量図、堤防の規模、築造費用等について詳しく記されている設計図（図①）、具体的な塩田地割図等の資料から、綿密な計画を立てながら開発を進めていたことがうかがえます。

また図②は何度も描き直された水門の図です。筆を手にして考え込み、構想を練っている様子が目に浮かびます。

▲図① 坂出塩田新開図　19.6×49.3cm



▲図② 坂出塩田水門図　26.3×28.8cm

文政12年（1829）には堤普請が完了し、天保3年（1832）、ついに坂出塩田が完成しました。

久米が設計した塩田は従来の塩田をそのまま継承したものではなく、いくつかの工夫をしました。そのひとつが海水注入口と排水口を別にして、排水溜を設けたことでした。それまでは海水注入口と排水口が同じであるため、雨が降り塩田内に雨水が溜まった場合、干潮まで待たないと排水できませんでしたが、このことにより雨水はすぐ排水溜に排水できたため、干潮を待たずに海水を塩田内に取り入れることができました。そのため採かん日数が多く取れ、塩の増産につながりました。

次に西大浜と東大浜の境に水路を造りました。奥にある塩田に海水を導入するだけでなく、船が航行することができたので、塩や燃料、物資の運搬に便利でした。

さらに久米は塩田だけではなく、塩田とほぼ同規模の畑地も造成し、港も整備しました。塩田の経営には多くの働き手を必要とする上、塩や燃料の取引、運搬に係わる人々等、急激な人口の増加が見込まれることから、それに対応できる食料の生産や居住地を確保するためのものでした。

『高松藩記』に「兼て見込之通土地大ニ繁栄致湊ヘハ数百之人家建続相賑ひ昔之貧村ニ引替他郡他村より移住之者夥敷繁昌之地と相成申候」と記されているように、坂出は塩田を中心に繁栄しました。

（宮武 尚美）

第３展示室

― レトロでモダンな暮らしの道具たち ―

明治から大正・昭和にかけて、日本人の暮らしは大きく変わりました。幕末の開国と明治維新を迎えて西洋の文物を取り入れることにより、社会制度や産業構造が変化し、それまで営々と、日々の暮らしをほぼ同じようなリズムで繰り返していたであろう人びとの物の見方や生活が一変したのです。

日常生活では、大都市圏を中心にまず男性の洋装化が始まり、西洋料理が上流階級と知識人を中心に浸透し始め、住生活では、椅子での生活が取り入れられるなど、「洋風化」が徐々に広がり始めました。

やがて、大正から昭和にかけては、女性の洋装化が進み、オムレツやコロッケ、カレーライスなどの洋食が誕生し、住生活では、洋間の応接間を持ち、和風のスタイルを保った和洋折衷の住宅が普及しました。それに伴い暮らしの道具もさまざまに変化し、また、改良を重ねながら使われてきました。

さらに、昭和30年代の高度経済成長期を境に、日本人の暮らしは激変しました。大量生産による消費革命でものの豊かさばかりを追求したこの時期が、それまでの生活習慣や社会通念さえも大きく変えてしまったのです。

人の暮らしが変わるということは、それまで受け継ぎ育ててきた文化を切り捨てることでもあります。時代の波に飲み込まれ、消えたものも少なくありません。便利になり、楽になり、豊かになって私たちはこれまで想像すらしなかった多くのものを得ることができました。これからもますますそうなっていくでしょう。しかし、同時にかけがえのないものを失ったことも、また、忘れてはならないと思います。

本展では、明治・大正・昭和初期の人びとの暮らしを彩ったさまざまな生活用具をご紹介します。大正時代のコーヒーカップや洋皿、煉炭ストーブなどの今からたった100年程前の当時にあっては斬新で、画期的であった生活用具からは、レトロでモダンな雰囲気が漂います。先人たちが、これまで使ってきたものを改めて見直すと、むしろ新鮮で温もりのようなものも感じられるのではないでしょうか。

（吉久 由紀子）

▲コーヒーカップとソーサー
東洋陶器株式会社
（大正6年-1917-創業　福岡県北九州市小倉）で製造

▲洋皿
日本陶器合名会社
（明治37年-1904-創業
愛知県鷹羽村則武）で製造

▲洋皿
日本硬質陶器株式会社
（明治41年-1908-創業　石川県金沢市）で製造

▲窯印
陶磁器や窯道具の底・肩・胴
などにつけられた目印

▲煉炭ストーブ
煉炭（粉末にした石炭を円筒状に
成形した固体燃料）を入れて使用

天皇と将軍の華麗なるパレード
—江戸初期の行幸図屏風の世界—

第7回公開講座から
実方葉子（泉屋博古館学芸課長）

京都観光の主要スポットとして、今日内外から多くの観覧客を迎える二条城。いまからさかのぼること 414 年前の慶長 8 年（1603）に徳川家康京都での居所として造営されたこの城は、幕末の大政奉還に至るまで数々の歴史の舞台となってきた。なかでも最も輝いたのが寛永の行幸の時であろう。その様子を伝える《二条城行幸図屏風》が近年知られるようになった。ながらく大阪の住友家に秘蔵されたのち、京都・泉屋博古館（せんおくはくこかん）に寄贈されたのである〔図 3〕。特筆すべきは保存状態のよさで、上品な金の輝きに鮮やかな顔料が散りばめられ、昨日描いたかのような印象すら与える。ここでは、その概要を紹介し魅力に迫ってみることとしたい。

◇二条城行幸とは

寛永 3 年（1626）9 月、大御所 徳川秀忠と将軍 徳川家光の招きに応え、後水尾（ごみずのお）天皇が二条城に行幸した。天皇が武家のもとに赴くことは歴史上でも数度しかなく、この行幸は豊臣秀吉の聚楽第（じゅらくだい）行幸以来、実に 40 年ぶりであった。行幸では幕府の威信をかけた豪華な饗宴が 5 日間にわたり繰り広げられた。それは幕府と朝廷の親密な関係を知らしめる記念的行事であり、とりわけ初日に天皇が二条城へむかう光景は、人々に強烈な印象を与えた。

▲図1　将軍の牛車（二条城行幸図右隻）

行幸では、まず中宮和子（まさこ）（徳川秀忠の娘）はじめ天皇家の女性が二条城にむかった。次に将軍徳川家光が大名を引き連れ天皇を奉迎するため二条城から参内、そののち、いよいよ天皇の行幸となった。これらの列には関白をはじめとする公家衆のほか、幕府方の諸大名も江戸警固以外はすべて参列していた。行列は禁裏から中立売（なかだちうり）通を経て、堀川通を南下し二条城東門から入城した。総延長は約2.6㎞、参加者は少なくとも9000人。先頭が二条城についてもまだ後尾は内裏を出発しておらず、行列は朝から日暮れまで続いたという。

◇描かれた二条城行幸

《二条城行幸図屏風》では、上段に堀川通を二条城へ向かう天皇や中宮らの朝廷方、下段に中立売通から内裏へ参内する将軍ら幕府方を整然と配している。その描写は詳細かつ的確で、例えば将軍や徳川家出身の中宮の牛車は、二頭立てで葵紋がほどこされ〔図 1〕、また天皇の鳳輦（ほうれん）は隼人（はやと）兵士や楽人らに先導され厳かに進む〔図 2〕。

▲図2　天皇の鳳輦（二条城行幸図左隻）

▲図3　二条城行幸図屏風　江戸時代·17世紀　（泉屋博古館蔵）　（左隻）

付き従う公家や武家は数こそ省略されているものの、配列や構成などかなりの精度で記録類と一致する。貴顕らがこの日限り許された自由な装いで着飾り威儀を正す様も目を引く。

◇沿道の人々

公武の行列とは対照的に、沿道ではおびただしい観衆が浮かれ騒ぐ様が活写される。下段の中立売通では、二階建の町屋が軒を連ね、上段の堀川通では、堀川に仮設の桟敷を組み、幕や屏風をめぐらした立派な席も見られる。記録によると、見物のために遠国からも人が集まり、前夜から桟敷で酒宴を催したといい、この屏風でも老若男女、貴賤をとりまぜた観衆は、行幸にかこつけて思い思いに楽しみ、なかには喧嘩騒ぎ〔図 4〕や美女をはべらせくつろぐお大尽〔図 5〕も見られる。また、豪華な着物、行楽用の野弁当に酒、茶、そして瀟洒な町屋の造作などが執拗なまでに描かれ、当時盛行した衣食住の文化を余すことなく伝える。ことに、江戸初期の装いの主役ともいわれる小袖は、大胆な意匠、細密な装飾、更紗のような輸入素材など、デザインが飛躍的に広がったこの頃の流行をよく捉えている。人数の上でも、表現の多彩さにおいても、画家の力点はこの沿道に注がれているように思われる。

▲図4　喧嘩騒ぎ　（二条城行幸図右隻）

（右隻）

◇屏風制作の背景

高い記録性をもつことがうかがえる《二条城行幸図屏風》だが、大きく史実と異なる点がひとつある。実際には将軍の参内以前に二条城へ向かった中宮らが、屏風では天皇の列と一続きに描かれている点。これは、上段=朝廷方／下段=幕府方といった対照を際ただせるためあえて行われた演出といえるだろう。

加えてここでもうひとつの極となるのが観衆である。行幸は徳川家の治世の揺るぎないことを世に知らしめるデモンストレーションでもあったから、観衆がいなければ意味がない。この絵の注文主はそのことをよく理解した人物であったに違いない。

ではこの屏風の注文主、作者はというと全く謎のままである。観衆の存在意義を理解する点ではひとまず幕府方の有力者の依頼と想定してみたい。また作者は、当時の主流、狩野派や土佐派の画風とは異なるものの、生彩に富む的確な描写からやはり一流絵師であったことは想像に難くない。そしてこの熱気あふれ実感こもる表現は、行幸からさほどへだたらない時期に制作されたことを物語る。

この後、幕府と朝廷の蜜月は長続きせず、わずか３年後に後水尾天皇は譲位を強行することとなる。歴史上の貴重な瞬間を捉えたこの屏風は、美術資料のみならず、歴史・文化資料として多くのことを伝えてくれるだろう。各方面からのより詳細な検証が待たれる。

▲図5　幔幕のなかの男女（二条城行幸図右隻）

慶長８年古活字版『太平記』について

（表紙解説）

『太平記』は、後醍醐天皇の治世の文保2年（1318）に始まり、室町幕府2代将軍 足利義詮（よしあきら）の死後、その子足利義満が政務を継ぐとともに細川頼之（より ゆき）が管領に就任した貞治6年（1367）までの、およそ50年間を描いた南北朝時代最大の軍記物語です。

この『太平記』の第38巻には、将軍足利義詮の執事をつとめていた細川清氏（きよ うじ）が幕府内で孤立した挙句失脚し、南朝方に帰順して讃岐に逃れていたのを、幕府の命によって討伐に向かった従兄弟の細川頼之に攻められ、貞治元年（1362）7月に坂出の白峯合戦で敗死したことが記されています。

本号表紙の写真部分には、清氏方は「白峯の麓」の高屋城（坂出市）に、頼之方は「歌津（宇多津町）」に陣を構え数日にらみ合いが続く中、頼之方は兵糧に困窮し、海路を絶たれるなど劣勢のため、清氏方の西長尾城（まんのう町）を攻め、布陣を崩して勢いを挽回しようとする様子が記されています。

『太平記』は、今も残る多くの写本や、物語を語る僧侶の朗誦によって伝えられました。江戸時代の慶長7年（1602）には木製活字印刷による版本が刊行され、また「太平記読み」と称する講釈師によって物語られて流布し、日本独特の忠臣文化を語り継ぐものとして、庶民にも広まりました。当館所蔵の『太平記』は、慶長8年（1603）刊行の古活字版で、全40巻20冊。京都の医師五十川了庵（い そ かわ）が刊行したものです。なお、『郷土博通信No.2』に書誌的データを詳しく紹介しています。郷土博物館のホームページでご覧ください。

（齊藤 祐司）

▲慶長8年古活字版『太平記』坂出市有形文化財

INFORMATION

■ 和三盆干菓子作り体験講座

平成29年7月29日（土）13：30～15：30
会場：鎌田共済会郷土博物館2階講堂
講師：上原あゆみ（豆花）
【申込7月1日（土）から、先着30名、参加料500円】

■ 鎌田共済会郷土博物館第８回公開講座

『江戸中期の讃岐の名医　合田強：「解体新書」の以前に書かれた「紅毛医言」』

平成29年10月28日（土）
13：30～15：00（開場13：00）
会場：鎌田共済会郷土博物館2階講堂
講師：板野俊文（いたのとしふみ　香川大学名誉教授）
【申込10月1日（日）から、先着40名、参加無料】

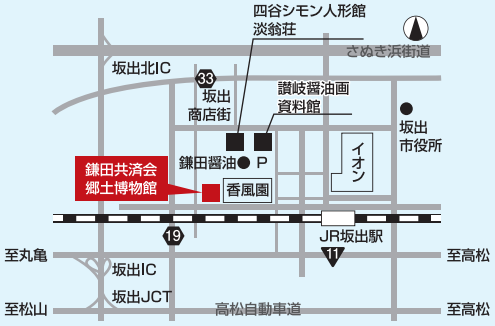
電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。
電話：0877-46-2275　　FAX：0877-45-0035
ＨＰ：http://www.kamahaku.jp/

■本紙記事

「天皇と将軍の華麗なるパレード」関連書籍のご案内

泉屋博古館 実方葉子（さねかたようこ）さんが、記事中の屏風絵を掘り下げて研究・解説した『二条城行幸図屏風の世界』2,160円（税込）が出版されています。お問合せは　泉屋博古館のホームページまで、どうぞ。
HP：https://www.sen-oku.or.jp/

鎌田共済会郷土博物館



Access
高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は4時まで）
休 館 日：月曜日／祝祭日
　　夏季特別（8月13日～15日）
　　年末年始（12月29日～1月4日）
入 館 料：無料

□発行 平成 29 年 4 月 1 日　□発行所 公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館 〒762-0044 香川県坂出市本町 1 丁目 1 番 24 号
TEL：0877-46-2275　FAX：0877-45-0035　HP：http://www.kamahaku.jp/　e-mail：k-museum@kamahaku.jp